

グループワーク

《感想》

- ・大人になるまで見届けることが難しい施設に努めているので、自分たちの手を離れた後を次に引き継ぐ大切さが分かった。
- ・誰にでも当てはまる特性があるが、そのでこぼこの特性を線引きではないことが理解できた。
- ・苦手分野が露呈しているから発達障害。その部分を調整していくことの大切さがわかった。
- ・成功体験を出来ることが大切だと思った。
- ・事例をたくさん知りたいと思った。就労してその先を知りたい。
- ・学齢期でどのような支援をすることで、その先を安定して過ごせるかを知る1つの手段としたいと思った。
- ・病院にもかかわらない方も、大人になって診断がついたりすることがあることをもっと世間一般に知っていてほしい
- ・診断と白と分けるのではなく、連続体やコップの話がもっと知ってもらいたい。
- ・重度の方で就職も難しい方の支援について考えるきっかけになった。
- ・発達の診断はないけれど、発達の症状がみられる子の親御さんにこれからのことも考えて受診を促すいいと思った。
- ・成人期に気がついた場合の支援の仕方を知りたい。
- ・線引きが難しいが、一人一人の特性、環境に合わせた支援が大切だと感じた。
- ・実際に障がい名は知っていたが、引きこもり、依存症などの裏に特性があり生きにくさがあると知れてよかった。
- ・お母さんのにおいをかいだりする特性、友達のおいやスキンシップとるこがいた。そういう行為を受け止めてしまう子もいるので、腕一本分の距離を置かせるよう指導しているが大人になるにはどう関わるといいか気を付けようと思った。
- ・改めて関わり方を考えるきっかけになった。できないこと、苦手なことを支援してあげたいと思っていたが、コップの話で得意なこと、苦手なことを把握し苦手を保障して、得意を生かすような関わりが重要だと思った。
- ・社会の適応能力と周囲のサポートの水の表現がとても分かりやすかった。
- ・放デイを卒業する際、お子さんによって不安や大丈夫かという思いが混じることが多い。地域ではどこをもつての卒業なのか社会性を考えると難しい。支援学校まで進めると就労などの道筋ができるが、中学校くらいで引きこもりになる子に関しては手を差し伸べられていない。
- ・グレー層の子の親の多様性への理解が難しく感じることもあり、本人が一番困っているだろうと思う。
- ・放デイ利用者はみんな特性を持っているのでそれぞれに合わせたかかわりが難しいが、環境調整の大切さを学んだ。
- ・グレーゾーンの子にはしっかり伝えた方がいいという話だったが、病院行って「大丈夫です」と言われましたと返事が戻ってくる保護者もいるので、繋げたくても難しいと感じる。

《明日からの支援で意識したいこと》

〈成功体験〉

- ・失敗で終わらせず、成功につなげてあげてことを意識したい。
- ・成功体験がたくさん積めるような支援を進めていくことと、失敗しても大丈夫という経験も積めるように支援していきたい。
- ・うまくいかなかった時に自己否定に陥らないかかわり方も必要。
- ・出来たことをほめてのばすかかわりをしていきたい。
- ・ADHD のお子さんには怒らないかかわりを続けたい。
- ・児、保護者のともに成功体験につなげていけるとよい。

〈児へのかかわり〉

- ・話をしてくれたことに対して、しっかり受け止める。話してもいい環境を整えるように意識している。
- ・話をしっかりと聞くようにしたい。
- ・安心して過ごせる場、友達とのかかわりを提供したい。やりたいこと、好きなことがない。こちらがまずは呈示して、みつけて一緒にやってみて、自己選択できるように促す。
- ・5年後・10年後を意識して関り、子供にとって良い体験となるよう、信頼できる親以外の大人との出会いでその子の人生が変わるのだと絶対に諦めず支援を続けたい。
- ・具体的に人とかかわるときに、どのようにすればいいのか手を持って伝えていく。
- ・就学後に必要な生活スキルを身に着けられるよう支援していきたい。
- ・特性のでこぼこも季節によっても変化するため、支援側から保護者から情報収集しかかわる必要がある。
- ・強度行動障害になる前に、小さいうちからルール作りなど考えていけるとよい。

〈自己理解、他者からの理解〉

- ・世の中の環境や人の理解が必要。
- ・親が我が子がどんなの子かを知れる支援が必要。
- ・自分自身の取り扱い説明書が作れるよう支援したい。
- ・誰にでも当てはまることからこそ、本人の努力不足に思われてしまう辛さがあるが理解していけるようにしたい。
- ・合理的配慮を自ら求められるように促していきたい。
- ・体調を整えて毎日来ること、困ったことを自分から表出するスキルが重要だと思う。
- ・幼児期は環境設定が大事だが、成長すると社会的な関わりのなかで折り合いをつけれるようになる支援も必要だと思う。
- ・困ったことをしてくる子はどこの特性からくるものかを意識して関わるようにしたい。

〈移行、連携〉

- ・学校、福祉が同じような支援を実施できるような体制を作っていくことは大切。
- ・学校に入っの他の活動で初めてきがかかりを指摘されることがある。学校活動を見据えた活動の関わりが必要と感じた。

- ・園から小学校、小学校から中学校と移行していけるようにしたい。
- ・上手くいった手法・経緯などを引き継げるとよい。
- ・地域の学校の中に福祉が入ることが理想。
- ・教員によって発達障害に関する知識や認識の差が激しい。教育現場全体に福祉に関する知識不足があると感じるのでお互い理解を深めていけるとよい。

〈進路〉

- ・特別支援学校は高卒の資格は得られないため、通信制、定時制の高校も支援級の受け皿になっている。
- ・中学生の不登校のお子さんが多い。発達障害のある子、グレーの子が不適応を起こして不登校になりやすいと感じる。小学校ではホワイトに近いグレーの子、思春期になると子ども自身の関わりが高度になると一気に落ちやすい。その子たちをどういう風に支援していくとよいのか。高校で環境が変わると思いがけない子が不登校になることもある。移行支援をどういうようにしていくとよいのか。就職もだが高校選びも大切。進学校になればなるほど、自分で進めないといけない。
- ・中学校から高校は進路が多様。知的障害の学級でも高校進学を選ぶ。社会適応力が大事。そこを学校で支援できたら。
- ・義務教育からはなれた後の行き先を考えた支援。

〈保護者支援〉

- ・親も特性がある場合の支援のあり方を考えていきたい。
- ・18歳の特性のある本人は困っているが、親が困っていない。特性があるから余計にお子さんに無理させたり、頑張らせてしまう保護者もいる。保護者を否定せず伝えていきたい。
- ・診断まではつかないけど、大人になってから困ることある。保護者と関わる際に気がかりさを共有していくようにかかわりたい。
- ・保護者にお子さんの特性に伝える際の言い方、かるたのようにうまい説明の仕方を身につけていきたいと思った。
- ・保護者からのきがかりさの訴えを学校では問題ないですで終わらせてしまうことも多いので適切な支援先に繋がれるとよい。
- ・学校では移行支援計画書の共有、個別シートの作成、短期目標を保護者の方に確認している。ふくいつこファイルがうまく活用の仕方が浸透していくとよい。
- ・保護者は単独で通うところを利用すると通えば育て返してくれると思っている人も増えているように思う。幼児期の支援は親が子のことをどんな子なのかを知れる支援が必要だと思う。
- ・保護者に将来を見据えた長期的な見通しを伝えていけるとよい。
- ・知的に遅れがあるといい意味で諦められて本人に合わせた就労を進めていけるが、知的に高いと家族の受け入れが難しく、ボーダーを下げるのが大切だと思った。
- ・まずは親支援から、親をどうケアしたらよいのか。どこに相談していいのか。保護者をまき込んでどう支援していけるか。
- ・保護者に対してどのように伝えるか、どのようなことを知ってもらおうとよいのか。児童発達支援セン

ターなど医療機関受診前にワンクッション挟むのも一つの方法

・保護者の受け入れ状況に差がある為、日々の関わりの中で本人の苦手な事・得意なことなどを伝えて、保護者との関係性を築きながら保護者に児の関わり方についての理解を深められるように支援していきたい。

・5歳児健診ではグレーな子の保護者に気づきを与え、学校につなげ不適應を起こさないようにしたいと考えている。グレーの子に対する保護者の気づきをどう与えるか、難しいと日々感じている。啓発するところが行政の役割と思っている。